

「界（元素）を考察する第五章」

三法（現象）の無我を説く＞界（元素）に法我を否定する＞章の著述を説く＞六元素が本性として成立したことを否定する＞虚空の元素が本性として成立したことを否定する＞虚空の元素において性相と名相を否定する＞事相を否定する＞性相が当てはまることを否定する＞〔前後を考察して性相が当てはまることを否定する〕

ここに言う。「諸界（元素）は有る。（何故ならば）否定していない故である。世尊によっても、『大王よ。このプトガラである者は、第六元素である。』等と説かれた。それ故に、善説の引用より、界（元素）の如く蘊や處も有る。」

述べよう。もし、諸元素そのものが有るならば、諸々の蘊や處が有るとなるうが、それらは無い。

「如何様に」といえば、説く。

虚空の性相¹の以前に、
虚空は僅かにも有るのではない。
もし、性相以前に有るならば、
性相が無いという背理になる。 1

そこで六元素と説かれたのは、「地と水と火と風と虚空と識」というものである。そこで、虚空の場合として批判を述べる。

ここで、虚空の性相とは「遮るものが無い」というが、もし「遮るものが無い」というこの性相より以前に事相²である虚空が有るとなれば、それに性相が当てはまるとなるが、性相である「遮るものが無い」の以前に虚空が有るのではない。そのように、「虚空の性相（定義）の以前には、虚空は僅かにも有るのではない」時、何に性相が当てはまるとなろうか。

それが無ければ、虚空の花のように虚空は無い。」と説かれた。

「もし、性相以前に有るならば、性相が無いという背理になる。」

性相の無い事物とは、
何も、何処にも、有るのではない。

ここで言う。「先ず、性相が当てはまることは有るけれど、それも事相に対してであるので、それ（性相が当てはまること）が有るので、事相も有る。」

¹ 性相：定義。これに対して被定義項（定義されるもの）を名相という。

² 事相：性相・名相がその上に成立している、拠所となる例。

これも有るのではなく、このように、

性相の無い事物が無ければ、
性相は何に当てはまるとなろうか。 2

「性相の以前に、性相の無い事物は無い。」と既に説いた。それ故に、性相の無い事物は無く、存在しなければ、ここで、性相が何に当てはまるとなろうか。然れば、性相が当てはまることは無い。

性相が当てはまることを否定する > [性相の有無を考察して性相が当てはまることを否定する]

他にも、「この性相が当てはまるならば、性相と共にあるものか、性相が無いものに当てはまることになるが、双方の如くとも不合理である。」と説く。

性相の無いものに、性相は、
当てはまらない。性相と共にあるものに（当てはまるの）ではない。
性相と共にあるか、性相の無いものより、
他にも当てはまるとはならない。 3

そこで、性相の無いものにおいては性相が当てはまることは無く、ロバの角における働きの如くである。性相と共にある事物においても、性相が当てはまることは不合理である。（何故ならば）必要が無い故である。性相を具えて成立したものに、再度性相による如何なる働きが有ろうか。そのようであれば、無限になる背理ともなるだろう。これは、何時にも性相と共にあるのではないとならないので、常に性相が当てはまるという背理になるが、そのように主張するのでもない。それ故に、性相と共にある事物においても、性相が当てはまることは合理ではない。（何故ならば）必要が無い故である。

そこでこう、『性相と共にあるものと、性相の無いものの二つより他のものに当てはまると主張することになる。』と思えば。

述べよう。

「性相と共にあるか、性相の無いものより、他にも当てはまることは無い。」

何故かといえば、あり得ない故である。

もし、性相と共にあるのであれば、性相が無いのではない。それは性相が無

いのであれば、性相と共にあるのではなく、それ故に「性相と共にあるのでもあり、性相が無いのでもある。」というこれは相反するものであるが、相反するものは、あり得るものでもない。それ故に、あり得ないので、性相と共にあるのでもあるが、性相が無いのでもあるものに、性相が当てはまることは不合理である。

事相を否定する> [それによって事相を否定したと示す]

仮にまた、『もし性相が当てはまることが無いようであるとしても、事相はある。』と思えば。

これも有るのではなく、何故ならば、

性相が当てはまるのでなければ、
事相は合理にはならない。

まさしく性相が当てはまることが無い時、如何様に事相となろうか。(まさしく有るのではない。)と御考えになられた。

虚空の元素において性相と名相を否定する> [性相を否定する]

ここで言う。「君は当てはまることを否定したのであるが、性相を(否定したの)ではない。それ故に性相は有るので、事相も、有るのである。」

述べよう。

事相が合理でないならば、
性相も有るのではない。 4

という。

「性相が当てはまるのでなければ、事相は合理にはならない。」と示した時、事相が合理ではないことで、性相も有るのではない。(何故ならば)拠所が無い故である。そのように性相が有るのではない時、「性相が有る故に事相も有る。」と言ったそれは、無い。

虚空の元素において性相と名相を否定する> [まとめ]

何故ならば、これはそのようである

それ故に、事相は有るのではなく、
性相はまさしく有るのではない。

とまとめたのである。

虚空の元素が本性として成立したことを否定する>事物として・無事物として成立することを否定する> [本義]

ここで言う。「もしまた、性相や事相が無いと見るとしても、事物の本性である虚空は有るが、虚空が事物の本性を持つものとなれば、事相、あるいは性相ともなるだろう。それ故に、事相と性相も有る。」

「これも正理ではない。」と説く。

事相と性相以外の
事物も有るのではない。 5

事相と性相が如何様に無いかは、既に前述した。これらが無い時、事相と性相と離れる故に、虚空の花のように虚空は無い。

「もし、虚空が事物になったことが無ければ、ならば無事物が有ることになる。」といえは。

これも有るのではなく、このように、

事物が有るのでなければ、
無事物は何のものであるとなろうか。

虚空が事物ではない時、事物が有るのでないならば、無事物は何のものであるかと考察されるのであり、

「もし、事物が成立していなければ、無事物が成立するとはならない。

事物が他に变化したものが、無事物であると、人は言う。」³

と、後述することになる。それ故に、事物が無いので、無事物である虚空も無い。「事物である虚空」とは、物質が無いことに設けられるのであり、それ故に、もし物質が有るならば、その時に物質が無いことを「虚空」というのであるが、

³ 「もし…言う。」:『根本中論』第15章5偈。僅かに異なる。「もし、事物が成立していなければ、無事物が成立するとはならない。事物が他に变化したものが、無事物であると、人は言う。」

斯様に説かれた正理によって、物質そのものが有るのではない時、何の事物が無いことが虚空となろうか。

事物として・無事物として成立することを否定する＞ [反論を斥ける]

ここで「それらは、尽く考察する考察者が有る故に、事物と無事物の二つはまさしく有るのであるが、斯くも

『事物が有るのでなければ、無事物は何のものであるとなろうか。』
 と言う、事物と無事物の『尽く考察するもの』である君は有るのでもあり、それ故に、事物と無事物を考察するものである君が有るので、考察対象である事物と無事物の二つも有るのである。」と言う。

述べる。それも適わない。何故ならば、

事物と無事物は合致しない法（現象）である。
 何ものが事物と無事物を知ろうか。 6

もし、その二つの考察者が有るならば、事物や無事物ともなろうが、有るのでもない。有るならば、尽く考察するものであるそれは、事物であるものとなるか？あるいは無事物であるものとなるか？

もし、事物であると主張するならば、

「事相と性相以外の、事物も有るのではない。」⁴

というこの批判は既に示した。

あるいは、無事物であるならば、

「事物が有るのではなければ、無事物は何のものであるとなろうか。」⁵

というそこで、既に批判を述べた。

この二つの分別をする、事物と無事物に合致しない第三の法（現象）である何かがあるのでもなく、それ故に、事物と無事に対する「尽く考察するもの」は無い。まさしくそれ故に、世尊も、

「諸事物を無事物であると知る者は、何時も全ての事物に執着するとはならない。何時も全ての事物に執着が無い者、その者は無相の禪定に触れる。」

と説かれ、その如く、

「諸法は空であると思惟する、彼ら幼子達は悪道に入ったのである。諸法は空であると文字によって述べられた。それらは文字が無いと文字に

⁴ 「事相と…ない。」：『根本中論』第 5 章 5 偈。

⁵ 「事物が…なろうか。」：『根本中論』第 5 章 6 偈。

よって示された。寂靜で熄滅の法を思惟する、その菩薩も、何時も現れることは無い。全ての戲論は心の分別（概念作用）であり、それ故に、諸法は不可思議と了解したまえ。」

等を説かれた。

虚空の元素が本性として成立したことを否定する＞ [諸批判のまとめ]

ここで、示したようにまとめる為に、

それ故に虚空は事物ではない。
無事物ではなく、事相ではない。
性相ではない。

と説かれた。

六元素が本性として成立したことを否定する＞ [その正理を残りの元素へも適用する]

虚空がそうである如く、

・・・・五元素である、
他の何れもが、虚空に等しい。 7

「それら残された他の地等の五元素も、虚空のように、事物と無事物や、事相と性相と離れると知りたまえ。」という主旨である。

章の著述を説く＞ [有無の辺見を叱責する]

それ故に、諸事物の本性はそのように留まることと、無明の眼障で知恵の眼がまさしく衰えたことによって、輪廻での無始より事物や無事物等に誤った見解に慣れ、無本性を誤りなく見る、涅槃に合致して行く道より衰えた、

小心者で、諸事物を
有無そのものであると
視る者達は、視られる対象が
熄滅した寂靜を見ない。 8

まさしく弱い心によって、有そのものと無そのものであると頭かに執する者達が、視られる対象が熄滅し寂靜の性相である、一切の分別（概念作用）から離れた、知と所知が退いた勝義の本質である、空性の本性を持つ涅槃を見るこ

とはない。

界（元素）に法我を否定する＞ [了義の教証と合わせる]

斯くも『宝行王正論』より、

「虚無論者は悪趣へ行く。実在論者は善趣へ行く。清浄を有るがままに
尽く知る故に、二辺に依らぬ者は解脱を得る。」⁶

と説かれた。経典よりも、世尊が、

「有と無という二つとも極辺であり、浄と不浄というこれも極辺である。
それ故に、二つの極辺を全く捨て去り、賢者は中央にも留まり存在する
ことをしない。有と無というものは論争であり、浄と不浄というこれも
論争である。論争する者は苦しみが止むことはない。論争が無くなった
者は苦しみが止む。」

と説かれた。

それ故に、「輪廻の道によって聖なる涅槃を得る」ということは、あり得ること
ではない。

界（元素）に法我を否定する＞ [章の名を示す]

阿闍梨月称の御口より綴られた頭句より、「界（元素）を考察する」という第
五章の解説である。

DECHEN 訳

⁶ 「虚無論者…得る。」：『宝行王正論』第1章 57偈。